

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 文化人類学からみた食文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009075">http://hdl.handle.net/10502/00009075</a>

## 第5章

# 文化人類学からみた食文化

野林厚志

牛、ブタ、ヘビ、イヌ……。同じ人類なら、どれも食べることができる「肉」である。しかし、食べ物だとは思わない人びともいる。それはなぜなのか。何をもって「食べる」「食べない」を決めるのか。文化人類学の視点から食をみると……。

## 1 人類学における食行動のとらえかた

タレントが「未開」の地など訪ねて、カルチャーショックを味わう番組、「世界ウルルン滞在記」。筆者も時々見ることもあり、どうやら見せ場が2つあることに気がついた。1つはもちろん涙の別れのシーン、もう1つは未知なる食事との遭遇のシーンである。この番組、タレントが派遣される国の違いで食べるものがずいぶん違ってくる。東南アジアの山岳地帯や南米のアマゾン流域が舞台となったときに、必ずといってよいほど食卓に登場するのがいも虫である。

タレントは恐怖におののき、時には叫び、顔をひきつらせながら、いも虫を口にする。その後のカメラに向かっての決め台詞は決まっている。

「意外にいけますよねえ、これっ!!」

このセリフには実は人類学にとって非常に大切なことが含まれている。それは現地の食物が自分たちにとっては食べないものであるということを「意外」という言葉で示していると同時に、それはやはり食べられる、場合によってはうまいものだということを「いけますよねえ」という言葉で示しているということである。ここで大切なのは、食べられるものと食べられないものという分類に加えて、人間は食べるもの、食べないものという分類を行ってきたということである。

食べられるもの、食べられないものという分類は、どちらかといえば生理学的な視点から考えるほうがよい。すなわち、人間が何を食べれば生存していけるか、そして、日常的な活動のために何をどれだけ食べればよいかという問題である。

この問題についてはもっぱら生態人類学が守備範囲としてきた。もともと人間の食行動の生理学的な関心は人類進化の問題とも結びついてきた。したがって、狩猟採集社会を対象とした生態人類学的な研究や霊長類学における類人猿研究では、食行動は直接的に扱われる研究テーマの1つであった。リチャード・リーらによるアフリカのブッシュマンの調査からは、狩猟採集民である彼らの食料の70～80%が植物性のものから成り立っていることが明らかとされた。またチンパンジーの狩猟行動や捕獲した獲物を分配するといった行動も、早くから霊長類学者の注目するところであった。

これに対し、食べるもの、食べないものという分類の問題は、少し専門的な言葉を用いれば、「文化的な適応」と言い換えることが

できる。これはいうまでもなく、文化人類学や民族学が扱ってきた課題である。

文化的な適応として食行動をとらえること、すなわち、食文化の問題はかなり早い時期から人類学者たちによって議論されてきた。食が社会構造、政治組織、親族構造、宗教といった人間の文化的な側面にどのように関わりあっているかということは、多くの民族誌(ethnography)において程度の差はあれ、述べられてきたことである。とりわけ、「未開」社会の食習慣は人類学者にとって「意外にいける」ものであり、「意外」なものなぜ食べられているのかが社会を読み解くうえでの鍵となっていったことは少なくない。

本章では、文化人類学者や民族学者が食文化についてどのような関心を払ってきたかを紹介しながら、文化人類学の脈絡から食文化を考えることにする。食文化を人類学の視点でとらえるということは、異文化や異なる社会を食というものさしで、どのようにはかっってきたかということといってもよい。

## 2 食は他者認識のバロメーター

英語で“Frogs”と言った場合、それはフランス人のことを指す。イギリス人はもともとカエルを食べるという習慣は持っていない。カエルの足を珍味として愛好するフランス人は、イギリス人にとってまったく別の人たちなのである。それが野蛮だという意味のこめられた「カエル野郎」というフランス人の蔑称につながっていくのである。

同じような現象は世界中の至るところで見ることができる。たとえば、中国の福建省で閩南系びなんの人びとが客家ハツカの人たちと自分たちとの違いを説明するときしばしば用いるのが、「客家の人たちはイヌを食べるが、自分たちにはそんな習慣はない」といった食習慣の

違いである。また、トマス・グレゴールが調査したアマゾン流域の先住民社会では、先住民の集団間における他者認識に際して、平和的で洗練された自分たちとは違い、彼らは森の中で人を殺すし、カエルやヘビ、ネズミを食べるのだといった具合に、食習慣の違いが持ち出されることがある。

「何々を食べる人たち」という言葉で他者と自分たちを区別する場合によく見られるのが、いわゆる「<sup>げ</sup>下手物」食いである。カエルやイヌなんぞを食べるのは、自分たちよりも劣った人たちであるということで、他者と自分たちとを差別化することは非常に多い。これは民族集団を区別するだけでなく、後にも述べるように社会階層を差別化していくときにもよく見られることである。

自分で栽培した農作物や養った家畜、狩猟によって捕獲した動物や採集によって調達する植物資源、いずれを利用する場合でも、一般に食料を調達するのは自らの周囲の環境である。食料の生産を自らは行わなくなった現代人も、食品を買うのは住んでいる地域にあるスーパーマーケットであったり小売店だったりする。周囲にある食物として利用可能なもののメニューはそれほど違わないにもかかわらず、食べるものと食べないものとのカテゴリーを変えることによって、自分たちとそれ以外の人たちという境界を作ってきた奇妙な生き物が人間なのである。アフリカのセレンゲティに住んでいるライオンが個々の群れごとに食べるものを区別しているという話は聞いたことがないし、考えにくいだろう。食べるものと食べないものを区別するということは人間特有の行為といえる。

著名な人類学者であるエドモンド・リーチの言葉を借りれば、人間にとっての食とは言葉や文化の問題であって、決して自然的、生理的な問題ではない。もっとも最近の食アレルギーの問題を考えた場合、食のメニューに生理的な選択圧が強くかかってくると考えら

れなくもない。しかしながら、それは個の問題であって、人びとが何を食べるのかという問題は、やはり文化的な背景を抜きにしては語れない。

リーチは人間の行ってきた、食べるものと食べないもののカテゴリーが次の3つに分けられ、それらを食べないという行為上の規範、すなわち、食のタブーと次のように結びつけて考えた。

①食物として認識され、正常な食事の一部として摂取される食用可能なもの。

②食物とは認められるが、禁止されているか、もしくは特別な(儀礼的)条件のもとでのみ食べることが許されている食用可能なもの。これらは意識的に忌避される。

③文化と言語の両方によって、まったく食物とは認められていない食用可能なもの。これらは無意識のうちに忌避される。

採食行動における他者の認識は、ある集団にとって②と③の食物が、別の集団によって①に分類されていることを知ったときに起こる、と考えてよい。

フランス料理のカエルや客家人にとってのイヌは他者から見れば③ということになる。日本のグルメブームはずいぶん日本人の食感覚を変えたとはいうものの、たとえば中国の広州の市場にぶらさがっている皮をはがれたイヌを見てたじろがない日本人は少ないに違いない。

また、食物そのものだけではなく、それをどのように調理するかということも、食物選択の重要な鍵をにぎることになる。同じヒツジの肉を食する場合でも、イスラーム教徒の場合は必ず決まった手順にしたがわなければならない。海鮮料理屋で水槽にはいったタイを網ですくってもらい、目で活け造りにするといったことを抵抗なく受け入れられるのは、日本人以外でどれくらい存在するのか

はおおいに気になる場所である。同じものを食べる場合でも、調理方法の違いによって自己と他者を区別することは少なくない。

言語や宗教、衣服といった違いがはっきりと見て取れるような文化的な特徴に加えて、食物選択や調理のプロセスを含む食習慣の差異は、集団を切り分けていく重要な要因の一つとなっているのである。

### 3 「同じ釜の飯を食べる」

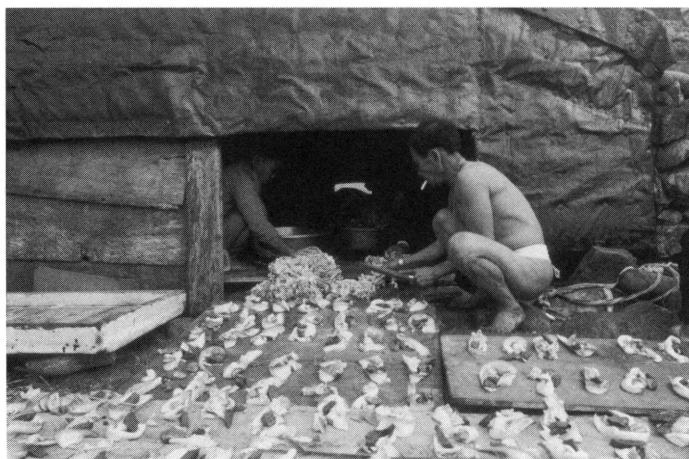
友人同士の親密度を示す言葉に、「同じ釜の飯を食う」があることは誰もが知っているであろう。同じ食物を食べるということを確認できる集団への共属意識は、さらに食事をともにすることによって、より強化されることになる。食事をともにすることを人類学では共食と表現する。文字通り「共に食する」という行為である。共食関係にある人間は特別に親しい間柄である、ということは暗黙の了解といえよう。

心理学者のフロイトはかなり早くから、共食には性的な結合と親族関係とが含まれると言い切っている。しかしながら、このことが必ずしも実際の人間社会すべてにあてはまるわけではないことは、人類学の調査結果から明らかである。たとえば、ミクロネシアのヤップでは、夫婦の食事は別々に調理され、食事も別々にとるのがかつての習慣であった。また台湾原住民のヤミの人たちは夫婦が食事をともにするが、食べることのできる魚が違うため、夫婦が別々の皿に異なる種類の魚を盛り付けて食事をする習慣をもっている。

家族であるからとか仲がよいからという理由で共食が行われるというよりは、共食という行為を通して集団内での人びとの関係性が調節されてきたと考えたほうがよい例もある。



台湾のツォウの人びとの祭りにおける共食の様子。儀礼の際の共食は社会関係を確認する大切な行為。[野林厚志撮影]



台湾のヤミの人たちの食肉の分配の様子。食べ物の分配は社会における人びとの関係を映し出す鏡のようなものである。[野林厚志撮影]



ヤングが調査したグッドイナフ島のカラウナの社会では、女性の場合は妊娠、出産を通して母親になることを自覚していくのに対し、男性は妊娠中の妻に食事を調達することによって父性に目覚めていくという。胎児の時にすでに食物を通じて父親と子どもとの関係が意識されているのである。

台湾のブヌン族の社会では、共食の社会的な機能がより顕著に現れている。台湾中央の山岳地帯に居住するブヌン族の人たちにとっては、狩猟で得られた動物の肉を分配し、共食に資することが非常に重要な意味をもつ。日本の社会人類学者、馬淵東一の調査によれば、ブヌン族の言葉で「一つの家」を意味する父系出自にもとづく氏族内の関係は、繰り返し行われる獣肉の共食によって示されると同時に、氏族の連帯性が強調され強化されていくという。これは競争的な氏族同士の関係のなかで、同一氏族の紐帯をより堅固なものとする機能を担っているのである。さらに興味深いのは、共食と食物の分配とでは、社会の中で機能を変えているという点である。共食は同一氏族の結びつきを確認し強化するために行われ、食物の分配は氏族間で行われることによって、氏族間の緊張関係を調整する役割を担っているのである。

実体としての人間関係があって共食関係が成り立っているのではなくて、共食や食物の分配によって親族関係や信頼感、友好関係や性的な結びつきが確認されるのである。また共食の範囲は文化ごとにきわめて多様である。家族であるからといって必ずしも食事をとむにするとはい限らない。家族や社会組織の構成原理や価値観が異なれば、当然のことながら食物の分配や消費のあり方にも差異が生じていくことになる。逆のいい方をすれば、共食ができる関係は、目の前の食物の分配から消費のスタイルにいたるまでのすべての行為について同意をした人びとの間でのみ成立しうる。そこには、無意識

のうちに同一集団への共属意識が生じていくと考えられるのである。

食物は生命の維持に不可欠であり、成長を保障し、さらに満腹感や味覚による心理的な充足感を与えることのできる媒体と考えられる。したがって、食物を与えることで愛情や友情を示すことが可能となる。逆に、食物の贈与や共食を拒否することは、人間関係に大きなひずみを与えかねない。人間関係をどのように保つかということに食が果たす役割は非常に大きいといえるだろう。

## 4 神との契約

食事をともにするのは人間同士だけではない。食物は人間と神とをつなぐ大切なものである。もともと食物の豊饒性は神が保証してくれるものであり、神に食物を捧げることは、与えられたものの一部を神に返すことによって、さらなる豊作や多産の約束をとりつけるということに他ならない。人間と神との関係を良好に保つためには、神との共食は不可欠な行為といえる。

人間が食をともにする超自然的な対象は神だけではない。時には生きている者と死者との間で共食や食物の分配が行われることもある。考え方によっては、死者はわれわれよりも神に近い存在であり、死者との共食は神との共食に相通じる部分があるともいえる。神が恵みを与えてくれるのと同様に、死者は生きる者のもたない力を与えてくれる存在なのである。

日本ではお盆やお彼岸には墓前や位牌<sup>いはい</sup>に亡くなった人の好物を供えることが少なくない。供えられたものはお下がりとして、お供えをした人たちの口にはいることになる。カトリック信者の間では万霊節 (All Souls' Day) の際、死者との共食が行われる。そこでも死者が生前好きであった酒やタバコといった嗜好品も食物といっしょに供えられる。

死者との関係は共食にとどまらない。死者の一部を口にすることによって、彼らを敬い、そして彼らから力を得るという習慣をもつ人びとも少なくない。南米のヤノママは愛する人が死んだ際、その人の灰を食することによって死者がよい死後の生活を送ることを祈念する。人類学者のケネス・グッドが彼らの調査を行っていた時にひどいマラリアにかかり、生命の危機にさらされた時、彼のインフォーマントが愛情をこめて彼に告げた言葉は印象的である。

「心配するな、兄弟よ。何も心配はいらないんだよ。私たちが君の灰を食べてあげるから」。

死者の肉体の一部を口にするという行為は、実は神性の一部を獲得するという行為にほかならない。これはパンとワインがキリストの一部であるというキリスト教徒の隠喩いんごと同じ構造をもつと考えてよい。栄養学的な力が意識される以前から人間は食物のもつ超自然的な力を自覚しており、それを得る1つの理由づけが神や死者との共食であったと考えることができるであろう。

## 5 食物のもつ権威性

食物は人間の食欲というきわめて生理的な欲求を満たすという点において不可欠な存在であり、人間を絶対的に服従させる権力を持ちうる。「武士は食わねど高楊枝たかようじ」とはいうものの、本当に食べられなくなったときにどれだけの人間がそれまで持ち合わせていた倫理観や価値観を保ち続けていられるかは疑問の残るところである。日本の歴史における一揆や飢饉の際の打ち壊しは、まさに食べることでできなくなった民衆が力で食物を獲得しようとしたことが出発点となっている。

食物がもつ権威性は、社会の中における主従関係もしくは上下関係が明確なほどその力が発揮されることはいうまでもない。階級、

カースト、人種といった社会の中で階層を形成する要素のいずれもが食物の取り扱いと密接に関連している。たとえば、インドにおけるカーストは、自分よりも低いカーストとの食事作法の差異や低いカーストが扱った食物に触れることを禁止することなどによって、依然として明確な区分けが示されている。

また、食生活の内容が社会内部での経済状態の差異や教育水準をはかる尺度になっている例もある。スティーブン・メネルはヨーロッパの各地域の事例をまとめ、野菜や果実といった健康維持によいとされる食品を中心とした菜食主義が社会的地位や経済的に裕福な層に好まれる傾向がある一方で、経済的、社会的地位が低い階層ほど肉食性の高い高脂肪な食生活に偏っていくと指摘している。

食物がもつ権威性が階層の区分をより強化していく作用は社会内部にとどまらない。グローバルな視点で食物の権威性を分析した有名な研究者がシドニー・ミンツである。植民地の拡大によりアフリカからの奴隷労働力の増加は、西インド諸島域におけるサトウキビプランテーションの飛躍的な拡大を実現させた。結果として、それまでは砂糖に手が届かなかった経済階級の間人が砂糖を摂取することが可能なぐらい砂糖の生産量が上がった。

問題はなぜ貧しい人たちが砂糖に飛びついたのかということである。ミンツの次の主張は重要であろう。すなわち、貧しい階層の人びとは富裕な階層に競いあうように砂糖を消費したということである。砂糖の消費は自分たちを変えるための手段であり、消費するものやその方法を変えるところに意味があったのだということである。では、結果として階級の差異が失われたかということ、残念ながらそこにはいたらなかったというのが結論である。すなわち、富裕層には砂糖の他にも特権的に選択する食物がいくらかでもあったからである。

少し悪乗りのきらいもなきにしもあらずだが、キャロル・アダムスの主張も取り上げておこう。アダムスは食物がもつ権威性とレイシズムの関係を世界経済という脈絡の中でとらえようとした。すなわち、先進国、とりわけ白人社会が消費する牛肉の生産のために第三世界の広大な土地が使われ、しかもいい部位の大部分の肉が先進国に持っていかれてしまう。こうした動物性タンパク質の消費はまさに「西洋白人社会」のつくりあげた「人種主義法」のようなものだということである。

食物そのもののもつ権威性や政治力に加え、留意しておく必要があるのは、その食物がどのように人から人の手を経て、その過程においてどのような意味づけがなされていくかという問題である。この問題についての人類学的な研究の嚆矢<sup>こうし</sup>とも言えるのがマリノフスキーのトロブリアンド調査である。

トロブリアンド諸島では社会の中にある程度の階層を持っている。一方で、その階層がそのまま権力関係に結びつくとは限らない。勤勉さと気前のよさが個人の名声を高め、社会的地位を引き上げていくという作用が社会の中に存在している。それをもっともよく表すのがヤムイモの栽培である。巨大なヤムイモを時間をかけ、労力を投入して栽培し、社会の中で展示して誇示することが社会的な威信を確立する有効な手段となっているのである。

こうした威信獲得のための食物の誇示や分配はトロブリアンドに限らず、太平洋地域に広く見られる現象である。先にも述べた台湾のヤミの人たちの場合は、家屋や漁船の落成式に際して、水耕によって大きく育てたサトイモを家屋や船が埋まるくらいに並べ、落成式の最後には式に参加した人びとに分配する慣習がある。分配されるのはサトイモだけではなく、ブタやヤギも相当な数が屠殺<sup>と</sup>され、同じように人びとにふるまわれるのである。こうした行為は、北米

の北西海岸インディアンが慣習的に行う闘争的、破壊的な食物贈与にならない、「ポトラッチ的」と表現されることも多い。

## 6 食と性とのアナロジー

食と社会との関係を考える際、性差の問題は避けて通ることはできないであろう。食物とセックスは隠喩として結びつくことが少なくない。たとえば、性的な表現は食物を通して行われることがしばしばある。

女性を果実のようにたとえ、その熟れ具合といったことが性的に表現されることも多い。たとえば食物である桃と体の部位である尻との間には、それらを結びつける関係性はあるが、形状や色から2つの関係が連想されていくのである。ここで注目すべきことは、女性が食物化されていくということである。

先に紹介したグレゴールの調査したメヒナクの社会では、性交が食べるという表現を用いて定義されるという。さらに重要なのは、一方の性器が他の性にとっての食物として表現されていたという点である。このことは性が消費される対象となっていることを意味しているともいえる。人類学者のキャロル・コニハンが指摘しているのは、男性よりも女性のほうが、その性が食物と結びつけて考えられる傾向があるということである。彼女は、女性が胎児や乳児にとってはまさに食料である一方で、女性の乳房が性的な喜びと食物の両方に機能している、と指摘している。

採食行動と性交とが象徴的に重なる社会は少なくない。それがゆえ、それらの2つの行為が誤ったかたちで行われたり、不適切なものが対象となるのを避けなければならない。そこで、採食行動と性交とに禁忌の体系が並行して発達してきたと考える立場がある。

オーストラリア原住民のウィック社会においてかつて慣行されて

いた妻と食物の授受者の関係や、トロブリアンド諸島民の男女の共食に関する規則は、それを説明するのに適した事例であろう。もっとも、すべての社会でこのような採食行動と性行為との関係がみられるわけではないので注意しておく必要はあるだろう。

社会によっては食物の贈り物が性的なつながりを促すうえで重要になることがしばしば見られる。ホルムバーグが調査したポリビアのシリオノ社会では、女性を誘惑するのにもっとも有効な手段は狩猟で得られた動物を贈ることであったという。もともと狩猟を生業活動の基盤にしていた彼らにとって、狩猟活動に長けているということは社会的にも重要視され、狩猟活動に長じている者が首長に選ばれていた集団である。

先に女性が食物にたとえられる現象について述べたが、男女がそれぞれ何を選択して食べるかという問題についても人類学者は関心を寄せてきた。

パプアニューギニアのフアはそのよい例の1つである。彼らの言葉でkorokoと呼ばれる冷たくて、湿潤で、柔らかくて、肥沃で、早く育っていく食物は女性が食べ、hakeri'aとよばれる熱くて、乾燥していて、堅く、あまり肥沃ではなく、ゆっくりと育つ食物は男性に関連づけられる。それぞれの性が相手の性に関連づけられる食物を食べることに対する禁忌はないが、女性がhakeri'aを食した場合は男っぽくなると考えられており、とくに月経の期間を短縮する働きがあると信じられている。一方で、男性がkorokoを食した場合、男らしさが失われ、表面的にはあまり歓迎されないという。

食物と性、そのなかでもセックスとは表面的には理解しやすいアナロジーによって結びつけられてきたとあってよい。しかしながら、いずれもが印象的な事実にそれらしい理屈を当てはめたとと思われるような部分も少なくない。ジェンダーという視点で食文化をとらえ

るとたんなる性差ではかたづかない問題を食がはらんでいることを次節で述べてみよう。

## 7 ジェンダー的食文化論

前節であげた食と性とのアナロジーは、いずれも既存の社会をきわめて本質的にとらえ、そこに生じている現象を比較することによって引き出されてきたものであろう。ジェンダー研究は、既存の社会はすでに性差にかかわるバイアスがかかったものであるという基本的な姿勢で行われるため、こうしたアナロジーは現象の説明にはほとんど通用しないといってよい。ジェンダー研究の視点から食文化をとらえるということは、食にかかわる意識や社会の仕組みが、それぞれの社会の文化的、歴史的産物であるということを明らかにしていくことといえるだろう。

今村薫は、ブッシュマンの社会における性的分業と食物規制に関する調査結果をもとに、人間社会に普遍的に見られると考えられてきた「分業起源説」を批判的に検討した。

今村によれば、狩猟採集経済における狩猟と採集という2つの大きな活動は決して排他的ではなく、また男女が狩猟と採集に専業する必然性は見られないという。男性—狩猟—公—文化に対して、女性—採集—私—自然といった二項対立的な現象は、ももとの属性としてそれぞれが連結しあっているのではなく、社会的規制やそれを解釈する側によって付与されてきたにすぎないと考えざるをえない。また、ブッシュマンは禁忌とまではいかないまでも、動物の肉に対する回避を行っており、回避の期間の長短や回避解除のための儀礼については多少の差異はあるものの、それが、男女の差異によって明確に区別できるほど強い差異とはなっていないと今村は解釈している。



筆者自身が調査している台湾のヤミの魚食における食物規制もジェンダーという視点からとらえなおすと、分配やタブーがたんなる性差ではかたづかない問題をはらんでいることがわかる。彼らは性別によって、食べられる魚とそうでない魚とを認識している。しかしながら、それらを区別する際に彼らを用いる名称には性差が付与されていない。男女とも可食な魚は「真の魚」とよばれ、男性のみが可食な魚は「悪い魚」とよばれている。すなわち、食のタブーが性差とはパラレルには必ずしも行われていないということである。「悪い魚」は、そのにおいによって女性が採食を回避しているのであって、社会、換言すれば男性が忌避の決まりを作ったのではないことに留意しておく必要がある。さらに、男性は「悪い魚」がある場合にはそちらを優先的に食し、「真の魚」は女性によって確保される状況を生み出していると考えられるのである。

従来の性差という概念に疑いのまなざしを向けることによって、食文化のありかたはずいぶん違った姿をわれわれに見せてくれることがこの2つの研究で理解できるであろう。分析のための概念を少し変えるだけで、食文化の研究に新たな可能性が生まれることは歓迎すべきことである。生業活動といった食物の獲得行動だけでなく、食事の支度や調理といった問題、さらには男女の嗜好差の問題も今後、ジェンダー研究の視点から再検討する余地は十分残されているといえる。

## 8 文化の所産としての食

文化人類学や民族学における成果にもとづきながら、さまざまな社会における食のありようがどのような文化的な要素と関連しあっているかを紹介してきた。それぞれの研究が示唆しているのは、食という営みが社会の中できわめて多様な側面をもっているというこ

とであろう。それは、おそらく一つの社会の民族誌を参照するだけではとうてい理解しえない、きわめて多義的な食のありかたを人間が作ってきたからにほかならない。禁欲的ないい方をすれば、文化人類学や民族学から捉えることのできる食の姿はあくまで個別的な現象であり、食の本質を抽出する作業にはとうていいたらないというのが、実際のところの本音である。

一方で、多義的な食のありかたを理解するということは、異文化、異なる社会の存在を認めるということにほかならない。「意外」なもの大半はそう感じる者がつくりあげてきた他者イメージに他ならない。いも虫もカエルもイヌもクジラも人間にとっては食べられるものであり、それを食べるか食べないかは、個々の社会がそれぞれの価値観にもとづいて決めてきたことである。言い換えれば、人間が他の動物と異なるのは、食べるものと食べないものとを区別してきたこと、食べるということに多くの意味を与えてきたということである。

一方で、人間にとって食がもつ意味が急速に変化しているのも事実である。巷に氾濫する<sup>ちまた</sup>栄養食品やサプリメントは確実に人間社会の食のかたちを変化させている。増加していく生活習慣病、遺伝子組み換え食品や家畜の伝染病によって生じる食の安全性の問題は、人間が食に対してあまりにも手を加えすぎたという見方もできるだろう。合理性、効率性を食に求めれば、確実に手痛いしっぺ返しを受けることは目に見えているのである。

これまで人間社会がつくりあげてきた豊潤な食を将来に残すためには、なぜわれわれ人間にとって食べるということが大切なのかを根拠を明らかにしながら説明していくことが必要となる。残念ながら、栄養学的、生理学的なその説得力を確実に失っている。食がこれまでに人間に喜びと豊かさを与えてくれ、将来もそうであること

を示すこと以外に、人間社会が築き上げてきた食を継承していく方法はないだろう。そのためには、人間社会に潤いをあたえてくれる文化の所産としての食の姿を描き出す努力が今後も必要となるのである。

### 参考文献

馬淵東一「ブヌン族に於ける獣肉の分配と贈与」『人類学雑誌』52-10, 1937年。

マリノフスキー, B. K. (寺田和夫・増田義郎訳)「西太平洋の遠洋航海者」『マリノフスキー・レヴィ=ストロース』世界の名著59, 中央公論社, 1967年。

リーチ、エドモンド (諏訪部仁訳)「言語の人類学的側面」『現代思想』4-3, 1976年。

Good, Kenneth, *Into the Heart : One Man's Pursuit of Love and Knowledge among the Yanomama*. New York : Scribners, 1991.

Mennell, Stephen, *All Manners of Food : Eating and Taste in England and France from the Middle Ages to the Present*. Oxford : Blackwell, 1985.

Mintz, Sydney W., *Sweetness and Power : The place of sugar in modern history*. New York : Virking, 1985.

Thomas, Gregor, *Anxious Pleasures : The Sexual Lives of Amazonian Peoples*. Chicago : Univ. of Chicago Press, 1985.

Young, Michael W., *Fighting with Food : Leadership, Values and Social Control in a Massim Society*. Cambridge : Cambridge University Press, 1971.

### further readings

河合利光編『比較食文化論：文化人類学の視点から』建帛社, 2000年。

竹井恵美子編『食とジェンダー』ドメス出版, 2000年。

Counihan, Carole M., *The Anthropology of Food and Body : Gender, Meaning and Power*. London : Routledge. 1999.